



金裕貞文学の翻訳Ⅷ：「山里」、「月兎」

朴，鍾祐
石塚，由佳

(Citation)

綜合文化, 2:297-309

(Issue Date)

2026-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100504226>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100504226>



■翻訳

(翻訳)

金裕貞文学の翻訳Ⅷ

——「山里」、「月兎」¹——

朴 鍾 祐
(PARK Jong Woo)

石 塚 由 佳
(ISHIZUKA Yuka)

I. 作品について

本稿は「山里の旅人」、「チョンガーとカエル」(1933年)、「夕立ち」(1934年)、「ノダジ (富鉾脈)」、「金採る豆畑」、「金」、「餅」、「ならず者」、「釜」、「春・春」、「妻」(1935年)、「秋」、「椿の花」(1936年)、「炎天」(1937年)に続いて、八度目となる金裕貞作品翻訳の試みである。今回紹介する「山里」は『朝鮮文壇』8月号(1935年)に、「月兎」²は『女性』7月号(1936年)に掲載された作品である。

一作品目の「山里」は金裕貞の故郷の村を背景に書いた作品の一つである。自然豊かな山里を舞台に、ソウルに遊学してしまった坊ちゃまを恋しく待つ召使IPPニの悲恋の物語である。この作品は、「山」・「村」・「石」・「水」・「道」の五つの小題から構成されている。「山」では、坊ちゃまがソウルに行ってしまった経緯や坊ちゃまとIPPニの恋について、「村」では、身分の違う恋がばれたお仕置にIPPニが奥様と母に殴られ、牢獄に閉じ込められたことが回想される。「石」ではIPPニに片思いするソクスンが二人の仲を冷やかしたため、IPPニに石で殴りつけられる場面が描かれる。そして「水」で、坊ちゃまがソウルで他の女と付き合っていることを伝え聞いたIPPニが湖に涙を落とし、最後の「道」では、ソクスンのIPPニへの恋心と、坊ちゃまからの手

紙を待つIPPニの姿が描かれている。

二作品目の「月兎」もまた兎を中心に展開されるいびつな男女の恋が描かれた作品である。貧しい少年の家に、ある日突然あらわれた白い兎に家族は大喜びする。しかし少年は家族が制するのにも聞かず、貧しさから結婚を断られたスギに兎を託した。ところが兎をかわいがっていたはずのスギは、少年に黙って兎を食べてしまう。少年はこれに憤慨したものの、スギが自分の兎を食べたことで、彼女が自分と結婚



『女性』7月号(1936年)

1 原題は「산골」、「옥토끼」。

2 「옥토끼 (月兎)」は韓国語では「玉兎」と書き、東アジアに伝わる伝説上の月に住むと言われる月兎のことである。この月兎は白兎を指して言うが、これは軟玉の乳白色から由来する。

せざるを得ない状況になったと大喜びする。

この二作品は、金裕貞の他の作品と同様に身分や貧困などによって結実しない男女の恋が描かれ、金裕貞の恋愛へのコンプレックスが垣間見える³。それと同時に、これらの作品では、少女の猟奇的な振る舞いを目の当たりにして、むしろ結婚が近づいたと喜ぶ少年のちぐはぐさに諧謔性を見いだせる。そして何より純情さの裏に凶暴さや狡猾さを併せ持つ少女たちが特徴的である。このような金裕貞の屈折した恋愛観や女性観は、一体どこから来たのであろうか。本稿では、金裕貞の女性観と生い立ちについて探ってみることとする。

Ⅱ. 金裕貞の女性観

金裕貞小説に描かれた少女は、性愛に素直で純情な少女が、打算的・攻撃的な一面を見せるような両面性が特徴的である⁴。「山里」のイップニには、坊ちゃまへの純情な恋心とソクスンへの猟奇的で打算的な態度が共存している。そして「月兎」の女主人公スギもまた、親に内緒で主人公と婚約し、兎をペットのように可愛がる点で本能的性愛に忠実で、子どものように無邪気な少女だ。ところがその一方で、貧乏な主人公に靴下をねだったり、兎を食べたことを叱られると拗ねて婚約を解消しようとする打算的かつ自己中心的な側面も併せ持っている。金裕貞小説の中の女性像は、このような二面性を持つ点で共通しているが、このような独特な女性像は彼の周辺の女性から着想を得たものと思われる。最も影響を受けたのは、故郷江原道の女性であろう。

金裕貞は1937年『女性』1月号に掲載した随筆の中で「江原道の女性」について、文化に染まっておらず、飾り立てない純朴さとみずみずしく丈夫な外見に、見栄・教養・礼儀がなく不愛想であるが情にもろい性格を持つ女性であると述べている⁵。江原道の女性の力強い生命力や土俗的な純朴さ、そして愛

情深い特徴は彼の作品の女性像に色濃く投影されている。

次に金裕貞が影響を受けたと思われるのは、家族である。1908年、金裕貞は村の役人で裕福だった金春植の次男として、二男六女の七番目に生まれた。一番上の兄の後、続けて五人の娘が生まれたため、家族の裕貞への注目は一とおでであった。ところが裕貞が7歳の時に母が他界、9歳の時には父まで亡くなった。姉たちは両親を早くに失った幼い弟を可哀そうに思い、可愛がったが、裕貞は姉たちに取り囲まれるのを息苦しく感じていた⁶。母への恋しさや、姉たちへの窮屈さ、そして思いを寄せた女性たちからの拒絶が、彼の小説の女性観に大きな影響を与えたに違いない。一方、金裕貞は死の前年である1936年『女性』6月号に自分の理想の伴侶について次のように述べている。

私は宿命的に人が嫌いです。言い換えると、人を恐れているというのがより適切かもしれません。いつも周囲の人物を警戒する癖があります。その癖が結局は言いようのない憂鬱を生みます。そしてひどい肺結核です。最近は毎日のように血を吐きます。

私と同じく憂鬱な、そして私と同じく血を吐く、そんな女性がいるなら、一度会ってみたいです。私はその人を限りなく尊敬します。なぜなら私は私自身が何であるのかをその女性に学べるだろうと期待するからです。

こうなると、これは恋愛ではないのかもしれませんが。単純に互いに理解し合える一人の友といえるでしょう。しかしもう一度考えてみると、

3 金裕貞の恋愛へのコンプレックスについては、朴鍾祐・石塚由佳(2024)で紹介した。朴鍾祐・石塚由佳「金裕貞文学の翻訳Ⅵ」、『海港都市研究』第19号、2024年、p.50。

4 韓相武「金裕貞小説にあらわれた江原道女性像」、『江原文化研究』第24輯、2005年、pp.112～113。

5 韓相武、前掲論文、pp.109～110。

6 全商國編、『金裕貞 小説選集 山里の旅人』、ヨニン M&B、2016年、pp.300～301。

異性の愛情とはここからようやく出発するのではないかと思います。(中略)

しかし一つ大きな疑問があります。互いに人が嫌いな者同士が一緒になって結婚生活が成り立つのかわかりません。もし駄目なら駄目で構いません。⁷

ここで語っている内容から、死に直面した金裕貞は自分自身の病と孤独に寄り添ってくれる女性を理想としつつも、その理想の成就には疑念を抱いていることが読み取れる。そしてこれを語った1936年前後に書かれた「山里」と「月兎」の中で描かれた少女たちもまた、彼の理想とは隔たりがある。この背景には、金裕貞自身の強烈なコンプレックスも影響していることだろう。

* 金裕貞文学に関しては韓国国内でも編集されたものが多数あるが、本稿では、金裕貞文学村村長を務める全商國編集の『金裕貞 小説選集 山里の旅人⁸』を底本とした。

Ⅲ. 作品翻訳

1 「山里 (산골)」

山

頭の上から見下ろしていたお日さまが西側へ傾いて、木に長い尾のような影が垂れてきたにもかかわらず、山菜を摘むつもりもなく、イップニは老松(朝鮮松)の腰のあたりに寄りかかって遠い空ばかり心うつろに眺めて立っていた。

空は晴れ渡り、あちらこちらにむくむくと湧き上がる白い花房はなぶさは美しく揺れ動く。あれも雲なのか、鶴たちは各々つがいになってその間に舞い込み、仲間同士で戯れる鳴き声たわむがこの森の中まで遠く降り注いでくる。

さまざまな木々は四方に葉を茂らせ、日差しにそ

の葉を広げ、ひらりひらり、風とともに山里に誇らしげに香りを放つ。

その空には、飛んでいるウグイスが可愛らしく—黄緑色の翼をはためかせ、この枝あの枝へ飛び移りながら、楽し気に幸せな歌を歌う。

—ホー！ ホケキョ！

こう愛嬌いっぱいに歌いもすれば—

—煙草吸って頭冷やせ！ のようにも聞こえる。

向かい側のあの岩の下はきっとトラ様が入りすほらあな洞穴だろう。薄暗いうえに、いばらの藪やぶの猿梨の蔓つるがごちゃごちゃにもつれ、屋根のようになっていて、これも石というのか薄緑の毛むくじゃらの実は可愛らしく並んで置かれ、そして今日も決まってカッコウが飛んで来て、その細い枝に足を止めながら—カッコー！ カッコー！ カッカッコー！

いつのまにかイップニは目がしらに涙の粒が浮かびはじめる。そして山菜の籠がぼんと地面に落ちると、両手に広げたチマでその間の顔をすっぱりと覆っては、

イップニはぐすぐすと、ただただすすり泣いて立っていた。

今になって後悔することは、坊ちゃまが勉強しにソウルに行かれる時、私も行くとなぜもっと引き止めて取りすがらなかったのか、考えれば考えるほど胸が張り裂けそう。しかし奥様の目を避け、小さな包みを脇に抱え、山奥を二十里も越えて付いて行ったイップニではなかったのか。イップニは尾根の近道を行き、奥深い峠の尾根で待っている途中で、峠を越えて来られる坊ちゃまの手首をしっかりとつかみ、「私は連れて行ってくれないんですか！」と哀願できないわけでもないが、いたずらに泣きながら前を塞ぐと、坊ちゃまは驚きながら、

「お前、なんで付いて来るんだ？ 夏に必ず来るから早く帰りなさい。」

7 「女性」1巻2号「彼らの結婚プラン——どんな夫、どんな妻を迎えるか——」、朝鮮日報社、1936年、p.5。

8 全商國編、前掲書、「山里」pp.121～137、「月兎」pp.241～246。

とお怒りになることが恐ろしかったが、それでも私を連れて行ってほしいとその体に取りすがると、坊ちゃまはしばらく呆然と立ちすくんでから、

「泣くな、 IPPニ。じゃあ、僕がソウルに行って、落ち着いたら連れて行ってやろう。」と背中を叩きながら慰める言葉に、もし IPPニが耳を傾け、真に受けさえしなければ、坊ちゃまのその手を切ない気持ちで離したりはしなかったものを—

「本当にきつと連れて行ってくださるんでしょう？」

「じゃあ、一月後には必ず連れて行ってやろう。」

「それなら、待ってます！」そして、朝日に照らされた坊ちゃまの裾が尾根にくねくね遠くに消えて行き、完全に見えなくなる時まで、 IPPニは誰かに見られやしないかと咲き乱れたレンギョウの花の中に体を隠しチマの紐を口にくわえて、涙で見送っていたのではないか。こんなにも強く誓ってお行きになったのに、その一月どころか幾月も経ち一年も経ったのに、坊ちゃまはこれという便り一つ伝えることすら知らない。さらに本当のことを言うと、老松の下で坊ちゃまと一番最初に目が合った時、 IPPニが先にそうしようとしたのではないが— IPPニの母親が奥様のお宅に代々奉公する召使いなので、その娘の IPPニはせいぜい血筋が召使のうえに、その一人前の召使にもほど遠い少女にもかかわらず、 IPPニは自分の身分を心得、小川で一人洗濯をする時に、坊ちゃまが時々絡んできて、いたずらのつもりかぼっちゃんの懐にぎゅっと抱きしめ、頬に噛みつきこうとするその姿が嫌らしくなく憎くめなかったが、 IPPニはあえてそんなことを考えてみたことはなかった。その日も奥様の食欲がなくて、 IPPニ、ちょっと山菜を取って来てとおっしゃった時、 IPPニはとても嬉しくて朝ごはんも数口で済ませて、籠をお供に家を出たが、歳はまだ十六歳なので奥様に可愛がられることがただ嬉しく、きれいな山菜を取って差し上げようと、まだ乾ききらず岩の隙間に散らばっている芝には、大きな青大将^{あおだいしょう}がとぐろ

を巻いて鯰^{なまず}一匹をもぐもぐ食べているところだったので、 IPPニはあがる息をひそめて、それをじつとのぞき見ていて、すぐ足の前に桔梗^{ききょう}の芽があるのを見つけ、ちょうど木切れで掘ろうとした時、思いがけず上から足音が聞こえるではないか。驚いて振り向くと、いつどこから付いてきたのか、坊ちゃまはトネリコの大きな枝を片手に杖をつき、赤い顔が汗まみれになってはあはあ言いながら、にこにこ笑っている。その姿があまりに怪しくて IPPニは目を丸くして見つめると、坊ちゃまはちょっと照れくさそうに顔を背けながら、しかしずっとにこにこ笑いながら張りのある声で—

「僕は杖を折りに来たんだ。」しかし、 IPPニは数日前奥様が呼び立てて、お前坊ちゃまと一緒に出掛けたらむちで叩かれるよ、とおっしゃっていたお叱りをふっと思い出し、

「なんで付いて来たんです—奥様に知られて、叩かれろっていうんですか？」ときつく言い放ったが、坊ちゃまはうわの空で聞いているのか、それでも相変わらずにこにこして、張りのある声で—

「僕は杖を折りに来たんだ。」そうしてから、 IPPニは怒らずにはおれず、

「奥様に殴られても、私知らない。」

独り言でこう強情を張ってつぶやき、行くなりやめるなり勝手にしろというようにそっぽを向いてさっきの桔梗をまた掘ろうとすると、坊ちゃまは無鉄砲に突然飛びかかり、

「お前が殴られるの、僕は知ってるよ。」

IPPニを後ろからぎゅっと抱きついて、汗がすうっと流れるその頬に、またもひどく噛みついて離さない。 IPPニは幼い頃から坊ちゃまと一緒に育ち、一緒に遊んだが、自分が先にそんなことを思っていたら、坊ちゃまをぐっと押しのけ、岩の向こう側へ真っ逆さまにしたはずは決してなく、尻をはたいて起き上がりながら、坊ちゃまが哑然として見つめながら残念がるその姿を見るのが哀れで、罪を犯した自身に対して申し訳ない自責がないわけでもな

かったが、また手首をつかまれてこの老松の下に引っ張られる時には、全力でその手を振り払うほど騒いだこともあったにはあったが、どこか心の片隅に意地を張って立てつきながらも、しっかりと引っ張られて行けるように、坊ちゃまの力がもっともってあればという考えがまったくなかったと言えば、それは嘘になってしまうだろう。もちろん IPPNI の顔が赤くなりながら、ずる賢い考えをしたちょうどその時、

「私知らない、奥様に言いつけるわ、私知らないからね！」と、少なからず焦りながらも、坊ちゃまの本心を一度探してみようと、

「誰が召使いにこんなことするの？」と、手を振り払いながらひどく怒鳴りつけてみると、坊ちゃまはこの深くひっそりとした山の奥にもかかわらず、耳に口をつけて静かにささやく言葉が―

「お前、僕と遠くに逃げ出さないかい！」すると、IPPNI はこの言葉を本当に真に受けて、男がこんなにひるむこともあるのか、坊ちゃまが地面に落ちているマッチ箱をポケットにまた放り込むのも知らずにあわてて山の奥に逃げ込むまでには、IPPNI は老松の根を枕にして草むらの上になっすぐ寝そべったまま青い空を眺め、今すぐ遠くに逃げたら私はあの坊ちゃまの若奥様になるだろうという考えで、奥様に持っていく山菜を掘ることさえ忘れてしまった。しかししばらく後に、IPPNI はなぜか自分でも恐ろしい気がして、ぱっと起き上がりあたりを見渡したが、そこには険しい岩と生い茂った森があるだけで、見た人は一人もいないのだが―おそらく山が険しいせいかもしれないだろうと。胸は相変わらず高鳴り、恐ろしくも、しかしこの山を自分の懐にぎゅっと抱き、二人で寝ころんでしまいたい、もどかしいような幸せな気分が感じられないわけでもなかったが、坊ちゃまはこのように情を深くさせておいて行かれては、今さら知らんぷりなさるのではなかろうか―

村

両手の甲で涙をぬぐい、ふと顔を上げたが、山菜を取る考えはなく、

IPPNI は老松の下に座って、遠い空を眺めながら坊ちゃまのことを考えて呆然とする。

今になって考えれば薄情なことに、奥様に殴られることになったのも結局は坊ちゃまのせいで、あらゆる恥をかかされたのも結局坊ちゃまのせいだったではないか―

毎日のように山に登るようになって、たった四日もしないうちに奥様は感づかれたのか、あるいは見当がついたのか、夕方に疲れ果てて帰って来る IPPNI を呼んで座らせ、

「お前、正直に言わないとひっぱたくよ。」と、細い鞭で尻が赤くなるほどピシッピシッと殴り、それでも生意気に我を張ると、今度は母親が飛びついて髪をぎゅっとつかんで拳で背中を三、四回どんと殴ってそれでやめれば良いものを、離れ部屋に押し込んで三、四日も外に出られないようにし、窓から差し入れられる臭い飯で虐められた IPPNI としては、苛立ち、悲しまずにはいられなかった。牢獄暮らしの最後の夜更けに IPPNI はあまりに恨めしく一人座って泣きながら、横になった母の腰をぎゅっと抱え、その懐に入り「お母さん、私坊ちゃまと暮らすわ―」と、とうとう自分の本心を打ち明けると、母は聞いたのか聞こえなかったのか、ただ静かに横になっていたしばらく後に、ふうっとため息をつく時には、すでに目に涙がたまり、そうしてしばらくすると口を開けて言うことには、今はこんなに老けてしまったが自分も年ごろの時は IPPNI くらい可愛らしく、とびきりすらしとしていて、大胆那樣とひそかに情を通じたけれど、幾月もしないうちに大奥様に知られて、ある日は呼びつけられ殴られて、ついには妬みの末にコテを持って膀胱を焼こうと飛びかかれたことがあったと聞かせてくれて、また何度も何度も同じことを言うが、ソクスンのところにすでに頼んでるところだから、坊ちゃまのことを

気にしてばかりいずにしっかりしなさい、ときっぱりと退けるではないか。もっとも IPPNI が可愛い一人娘でなかったなら、三日後にも外にも出られなかっただろうが、ようやく門を出て見ると、その間に世の中が少し広くなったようで、まるで檻を抜け出した獣のように体の身軽さを感じ、ぞっとするような山をぐるぐると取り囲んだこの山里から抜け出し、広い所へ出るなら嬉しいことこの上ないだろうと考えてみもし、母の命令どおりに唐辛子畑の草取りをしに小川の道へ下ろうとすると、左側の森の中から坊ちゃまが突然飛び出して来て、また引き止めて、山に行かないかとしつこくせがむ。村に行き学校に行っていたが、最近は休みになり、家に帰って来た後からは勉強をするつもりもなく、毎日暮れるまで自分ばかり捕まえに来る坊ちゃまが哀れではあったが、一方で奥様も恐ろしく、またせつかく許されたところで同じことをしてしまうと今度こそはきついお叱りを受けると思い、IPPNI は今日はだめだから明日明後日にでも行こうとなだめたが、それでも聞かず頑固に行こうと煩わすので、仕方なく体を振り払って逃げるしか他にすべがなかった。じめじめと降っていた雨のせいで、しばらく手を掛けられなかった唐辛子畑は草がかなり伸びて絡みつき、どこから始めればいいのか見当もつかないが、IPPNI は適当に隅っこでチマの裾を内側に巻き入れて座って、これだって仮にも草取りだろうと手鋤で地面の表面ばかりほじりながら、実のところは昨晚、召使いは主人と住めないのだと言った母の言葉が正しいのかどうか、そればかり心に刻みつけながら何度も繰り返して言ってみる。しかし IPPNI はいいかげんに、私は坊ちゃまと必ず暮らしてみせると一人で誓って、私がお嬢様になれば、お母さんは奥様になるだろうにどうしてそう大げさなのかと思って恨めしく、日が半日過ぎ首筋がかつかと焼けるまであれこれつくづくと考えていて、顔を上げて見ると畑はこれまで一畝も終わらせなかったもので、この畑め、と畑のせいにして自分でもあくびが出るほど

かなり呆れてしまった。今度のもっとさっさとしようと考え、IPPNI は手鋤を素早くてきぱきと突き刺して飛びかかったが、それでもなぜか仕事は手に付かず、そればかりか背中の後ろの小川の草むらではいろいろな鳥たちが好き勝手にささやき、遠く下の方で草を食んでいた牡牛がモーと長く声を伸ばすと、IPPNI はこれを聞いて突然体がだるくなってしまい、畑のへりに立っただれ柳の影に横になってひと眠りしたいとすぐさま思ったが、母が怖くてとてもそうすることができない。もう女の子は畑仕事をしないようになれば良いのにと思い、IPPNI はかっとなって手鋤を放り投げ、顔の汗をぬぐいながら座ってのんびりしようとしたところ、野原に麦を取りに行くところなのかソクスンが空の背負子を背負ってふらふら畑の端に来ると、とても差し出がましく皮肉のような口ぶりで IPPNI に向けた言葉は—

「お前、坊ちゃまとそうなんだって—」と、まるで青く光る鋭い刃物で切られたようなことを聞かれたにもかかわらず、それほどまでにはうんざりしていないが、IPPNI はどこで聞いたのかと問いただしてみてもなく、顔がそれだけでニンジンのように赤くなり、そいつの仕業を思うと今すぐにも飛びかかってその耳たぶにでも噛みついてやりたい気持ちはやまやまだったが、自分の非もあってそうする勇氣もなく、ただただうつむくばかりだ。そうするとソクスンは偉そうな態度で IPPNI を見下しながら、畑の真ん中まで入って来て、どっしりとふんぞり返って立ちながらもう一度小生意気にそして皮肉たっぷりな声で—

「お前、坊ちゃまとそうなんだろ—」以前なら自分が IPPNI に背負子棒で尻を叩かれるとも思わず、大胆にもこれしきのことどころか父が商売している畑の番小屋でこっそり甜瓜を取って来て、

「おい、IPPNI。これ食べろよ。」というと、

「私、あんたがくれたものは食べないわ。」と、何度言い捨てても負けずに、無理に食べろと押し付け

るので、 IPPニが仕方なさそうに受け取ってもちろんチマに土をごしごしこすってかぶりつきながら座っていると、どうにかして IPPニに気に入られようと手鍬^{てくわ}を代わりに手に取るやいなや、せっせと草取りをしてくれて、そして時々 IPPニを笑わせるために、これも芸だといいいながら畝間で、よくいって熊のような体つきであちらこちらで転がってみせた。ソクスの父はこいつまたどこに逃げ出したんだ、と探しながらここへ来てみると、草取りをしうと言った自分の畑はせずに他の女の子の畑に入って一体まあこれは何の真似なのか、このざまは、呆れて開いた口が塞がらないと、笑いそうになるところを無理に抑えて腹立たしい顔をしながら、

「こいつ、自分の畑は草取りしないで、人の畑に入って何やってんだ？」

と叱ったが、ソクスがびっくりして振り返ると、ひょろりと尻の土を払って立ち、

「IPPニの畑の草取りをしに來たんだ、なんだよ？」と、かえってぶっきらぼうに我を張るのには責めずに、

「どうしようもないやつもいるもんだ！」と引き換えて向こうに行く途中、見えないようにへへと笑ってしまうのだが、すると IPPニは自分の立場がずいぶんおかしいことに気付いて、あちらまではっきり聞こえるように、

「あんたに誰が畑の草取りしてって言ったのよ？行きなさい、早く。行って行って。」と、食べてしまった甜瓜^{まぐわうり}のことは考えずに、背中を押しつけ責め立てただろうが、ソクスが今になって IPPニの機嫌を損ねるなんて、空が崩れてもそれは到底話にならないことだ。

石

IPPニはよほどの恥ずかしさに全身が熱くほてるようだったが、しかし少しすると恥をかいだ仕返しをしなくてはと思い、とげとげしい反発心が胸をぶすつと突き刺す時には肩だけでなく背中全体がび

くびくし、何食わぬ顔でぱっと立ち上がり、辺りを見回すと昼間なので皆仕事に出掛けて村に人がいないことを知り、ソクスの袖をそっと引っ張ってその隣の立派に育ったキビ畑の中に入って行く。畑の真ん中はこじんまりとしていてどこからも見えないので無茶に騒いでも大丈夫だろうと信じ、IPPニはそこにソクスを立たせておこうと、畝間^{うわあい}に散らばったたくさんの石の隙間からぶたれても死なず硬くて痛い程度の小石一つをつかみ取り、その隣の腰^{すね}を激しく殴りつけながら、

「こいつめ、何がどうだって言うのよ？」と、がんがん責め立てるので、ソクスは初め何かあるのかと喜んで付いて來たのに、いきなり思いがけないことに角張った石ばかりが飛んでくるのには、

「痛い！」と叫ぶと、ぱんと流れ弾に当たった獐鹿^{のろじか}のようにぴょんと一度飛びながら、目がそれこそ大きい鈴ほどにならずにはいられなかった。しかしソクスは憎さより先立つのが喜びで、以前は横を通り過ぎて見るのか見ないのか、そうたいして考えてもくれなかったあの IPPニが、わざわざこっちへ引っ張って来て石で殴るのだが、本当に痛いように力を入れるほど IPPニにとっては今の自分の存在がそれほど惨めなものではないことをその石からようやく悟り、意地悪くにやにや笑いながらもう一度ひねくれた、そしてだらしない声で、

「何だよ、坊ちゃまとそうだってのに…」と、からかってやった。IPPニは

「何よ、こいつ！」と上気した目をまっすぐ見据えたが、今度は石をつかむ考えはせず、さっきからかうじて我慢してきた涙が、

「うう…！」とすうっと出ると、とめどなく溢れて来て、ソクスの胸に取りすがってかきむしると、ソクスは IPPニを泣かせたことが自分の大きな罪であることを素早く理解し、目を丸くして、

「違うよ、違うよ、俺わざとやったんじゃないんだ。」と口に火が付いたように、しかし手で背中をさすりながら、「違うよ。」と何十回言った頃には、よ

うやく泣きやみ、 IPPニがまだすすり泣く声で何度も頼むと、

「これから人に聞いた通り言ったら、私あんたのこ
とぶん殴るわよ？」

「うん、もうしないよ。」

本当にこんな悪いことは二度と口にしないと誓った。IPPニもようやく落ち着き、跡が残らないように涙をぬぐいながら、

「今度やってみなさい、殴ってやるから！」

もう一度念を押して唐辛子畑にまた行こうとする時、ソクスンが突然飛びかかって来てしっかり腰に抱きつき、

「じゃあお前、俺のところに嫁に来いっていうのに何で嫌だって言ったんだ？」と、仮に煩^{わづら}わせたとしても、もしIPPニのこのやり取りを坊ちゃまが知ったなら、すぐさま情を断ち切ろうとする恐れさえなかったなら、そう大したことではないのに、あんなにひどくこらしめるはずはなかっただろうと思うと、くどくどと今まで後悔するほどあんなに男の頬を殴りつけたのも、結局坊ちゃまのためのIPPニの清らかな情ではなかっただろうか。

水

悲しみで満ちた心を涙でぬぐい、山菜の籠を手を持つと、IPPニはまた立ち上がり、山の中腹の荒れ果てた森の中を這い下りて桔梗を一つ二つ掘り始める。

本当か否か詳しくはわからないが、遠く伝え聞いた噂では、坊ちゃまはソウルに行き、きれいなお嬢さんとまた付き合っていると、それだけならまだ良いが、奥様は奥様なりに良い年をした男がそのままだと病気になると言って、気立ての良いお嬢さんを探しているらしく、一体これはどうしたわけかIPPニは頭が痛く、桔梗を掘るといって木の棒を地面にぶすすと刺すと、その突き刺したまま日ばかりがどんどん無^{むい}為に暮れて行く。気を落としながらまた降りて来る途中でIPPニは目の前によっきりと

そびえる岩を胸に抱きかかえて、その下を見下ろすと険しい石壁の隙間に清らかな水が深くてどんよりと溜まり、薄暗くなった空の赤い夕焼けの片方を切り取って、青い葉で縁^{へり}を平たく縁^{ふち}取ったので、その様子があまりに美しい。それを鏡にしてIPPニはその下に黒く照らされる自分の姿をもう一度改めてよく見てみると、一時は坊ちゃまがせがんで具合が悪くなるほどだったが、服は例えみずばらしいといえども自分の目にも悪くなく、人の顔立ちよりきれいではあろうが、何が足りないのか他に目移りした坊ちゃまの心情が知れず、いつのまにか恨めしい涙が目から落ちると、静まり返った水面に波紋を描く前に、これが何かエサにでもなるだろうと大きなオヤニラミがすすいと上がって来てばかりと食べてから潜っていく。IPPニは気が抜けた間抜けのように清らかなこの水をじっとのぞき見たところ、不意に自分の体をどぶんと投げてすっかり溺れ死にたい、いやどうせ死ぬなら情が移った愛しい人の懷に抱かれ一緒にどぶんと落ちて世間を一切忘れてきれいさっぱり死にたいと思い、それなら坊ちゃまがこの背中にばたとうつ伏せになり頬に頬をこすり合わせて、この水を一緒に見下ろしながら、

「やあ、泣くなよ。僕が本当に行ってしまうと思うのか？」と慰める時、ぎゅっと掴んでどぶんとなぜ落ちることができなかったのか、今さら恨みが募ったが、IPPニはそれでも生きることに餓えていたのか、

「本当に今年の夏に必ず来るんでしょう？」と、さっきから何度も尋ねたことをもう一度問いただしてみると、坊ちゃまは躊躇なくはっきりと、

「もちろん来るさ。お前を置いて来ないと思うのか！」と答え、手で折った黄色い椿の花を水の上に放り投げながら、

「お前、この水が何の水かわかれば大したものだよ？」

目をぱちくりさせながら話していくのだが、昔この山の中に一人の商売人がいて国では彼を捕まえよ

うと四方八方に兵士を置いた。しかし商売人には虎のようにすばしこい翼が生えていたので、空中を軽やかに飛び、彼を捕まえる術はなく悩んでいたある日、ついにこの水で水浴びをしているところを生け捕ったというのだが、なぜかというに神様が召し上がるきれいなこの水を体で汚したのは誰かと天罰が下らないはずはなく、体に水が触れるやいなや生えていた翼がめちゃくちゃに溶けてしまったわけだと言ひ、坊ちゃまは手ぶりで商売人のむごたらしい最後を真似ながら、一番恐ろしそうに目を大きくぱちぱちさせると、続けて言うことに―

「ああ、怖い！ やあ泣くな。あの水に涙が落ちれば、お前は大変なことになるよ。」しかし IPPニはそんな話は聞いているのかどうかあまりすっきりしないまま、数日後ソウルに発てば、完全に見失ってしまいそうで坊ちゃまの顔をじっと見つめて、それじゃあ約束して行ってくれという、坊ちゃまが少しもためらわずに、着ていた自分のチョゴリの結び紐の一方をぱっと取って IPPニの腰にぎゅっと差し込んでくれながら、

「お前、それでも信じられないのか？」と言うと、恐れ多い上にまさかこれを置いたままお忘れにはならないだろうと心強くないわけでもなかった。立派な大人だけに、こうしておいて心変わりはないだろうが、それでもよく問いただして見ると、この紐が言うことでもないが、いっそ付いて行くこともできず、ふと心を持ち直し追いかけたのは良かったものの、もう少し取りすがってしつこくねだらずにそこに座り込んでしまったので、今となっては恨みばかりが募り、大切に身に付けていた結び紐をこの手に取り出して持ち、涙を流しながら仕方ないのかと甲斐なく虚しさばかりが積もっていく。しかしこれさえもなかったなら、それは生きがいさえすっかり失っていたであろうが、最近は何日のように、

この険しく深い山を上がって来て、
昔の記憶を一人でたどって見ながら

IPPニは日が暮れるまでこう泣きながら立って

いるのだ。

道

全ての鳥たちは昨日のように歌を歌ひ、日も晴れ渡っているが、

今日はなぜか

IPPニはまだ登って来ない。

ソクスンは父が村の市場に行つて鶏を三羽売つた金で塩を買つて来いと言ひ、朝早く出たのも忘れてこの山に登つて来て、脚を縛られた鶏たちはかたわらに放り投げ、老松の影に寝転び首を長くして待つたが、IPPニがなかなか来ないので、どうしたのかあいつまた怒つてゐるんじゃないのかと煩わしくこのように胸を焦がす。早くも秋になつて穀物を収獲すれば IPPニを嫁にもらえるだろうと嬉しいことこの上ないが、今度もまた IPPニがご飯も食べず死ぬのだと騒げば、無駄になるのではという心配もなくはないが、あんなにいつも冷ややかだつた IPPニの態度が最近になつて急に大人しくにらみつけることもないので、これはまったく踊つても踊り足りないほどだ。それだけでなく霧雨が降つていた日、奥様の家の垣根の後ろで IPPニはトウモロコシを立て取り、自分がその横を通り過ぎる時ひそかに手ぶりをするので近づくと、耳元に低くささやく声が一

「あんた手紙一枚書いてくれない？」

「うん、書いてやるよ。俺上手く書けるよ。」ソクスンはとても嬉しくて慌てふためきながら、聞きもしないことまで言いながらお前の言う通りしてやる、と坊ちゃまに手紙を書くが、IPPニはずっと待っていますと、そしてこのことは最初から口外するなと言うので、そんな手紙なら一年待って書けば良いだろうと内心思いながら不慣れた鉛筆の文字で五行を書くのにまる二日も徹夜し、約束通り IPPニに会ひに山へ登つて行く時、どうしたことか胸がどきどきするのが、まるで妻に会ひに行く夫のその喜びがはっきりと感じられるのだ。IPPニが早く登つ

て来て何が一番好きか聞いてみて、この鶏たちを売って贈り物を買ってやろうと思うが現れず、ソクスンはいくら考えても訳がわからないが、おそらく先だって、

「この手紙書いて来たら、お前俺と必ず暮らさなきゃならないぞ。」と、ひどく言い聞かせたのが間違いだったとしても、 IPPニががっくりとうなだれながら、

「うん。」と目に涙を見せて、

「その手紙読んでみて。」と穏やかに言ったのを見れば、そう怒ったようではなかったので、ソクスンは嬉しくてその前でどっしりと威勢よく、自分が書いたのに自分で読めないその手紙をたどたどしく、「坊ちゃんに申し上げます。お行きになられて長く経ちますがなぜ戻られず、一年半になります、なぜ来られないのかと思うと IPPニは夜毎涙で夜を明かし、このままでは IPPニは死んでしまうので早く飛んで来てくださいー」このように汗をかきながら読んだが、 IPPニは全部読んだ後、それを受け取って封筒に元通りに入れて、山菜の籠の奥に隠してはそのまま黙って山を下りる。山すそへ下りると前には大きな川があり、等しく散らばり打ち込まれた険しい岩の隙間で水は雄大にぶつかり合いながらざあざあと流れ落ちるので、気が動転しそうになった IPPニは注意深く岩を選んで踏みしめながらこちらに渡って来たが、いくら考えても一緒に遠く逃げ出そうと言っていた坊ちゃんが、ソウル一人でひょいと逃げたその胸中が分からず、男の気持ちだとえ変わるといっても、松の下でそんなに涙まで浮かべてせがんでいたあの坊ちゃんが今となっては望みもなくお変わりになったとは、神の仕業としか考えられないだろう。 IPPニは山のように葉が伸びた姫黄楊ひめつげの木の下に来て足を止め、片手で籠の手紙を取り出して前掛けの中に隠し持ち、ソクスンが書いた手紙も受け取れるかどうか心配ではあったが、同時に坊ちゃんのところへちゃんと届くとすれば、これを見て驚いて飛んで来るのではないかと、それ

さえも言い切れないことであったが、いや、いらっしゃる、この結び紐を置いて行かれた坊ちゃんなのまさかこの手紙でも来られないはずはないだろう、と一人で立って言い張って日が傾く遠くの峠を見つめながら郵便配達夫が来るのを待つ。郵便配達夫が来ても三日に一度しか寄らないことは自分でも知らないわけではなく、昨日来たので明後日にでも来ることは当然わかっていたが、それでも IPPニは山道に迷った人のようにあちらの山すそ急斜面へくねくねと回り出る長い山道から今すぐ郵便配達夫が見えそうだと見えそうだったのか、日がすっかり傾き、暗くなっても退屈そうにこうして気をもみながら郵便配達夫が来るのを待つ。

しかし

今日はどうしたのか、

昨日のように天気も晴れ、山の鳥たちは歌を歌うのに

IPPニはまだ出てこないのだ。

2 「月兎（옥토끼）」

俺は一羽の兎のことで、寝ても覚めても頭が一杯だった。どうすればこいつを早く育てて子どもを産ませられるかということだった。

この兎は神様が俺に与えてくれた宝物だった。

ひどく寒かったある日の朝だった。俺がまだ夢の中で遊んでいた時、母ちゃんが腕を揺さぶって起こす。朝が弱くて起きるのが遅いのを知ってるくせに、寝ているところを起こすので、余計に腹を立てる俺だった。ひじでその手をぱんとはたいて、

「ああ、まったく。」

こう怒ると、

「あんた、この兎嫌なの？」と、じゃあ、いいよねと言いつつ俺を引っ張るのだ。

俺は夢うつつで、じゃあ父ちゃんが多分久しぶりに肉が食いたくなって兎肉を買って来たのか、ああ、母ちゃんが俺に食わせようと起こしているんじゃないかと思った。そして振り向いて、しょぼしょぼし

た目を開けてみると、こりゃどうしたことか。^{こぶし}拳く
らいの真っ白な月兎一羽が、母ちゃんのチマの前で
すっぱり包まれているではないか。

俺は目をこすって、あわてて近寄って座り、

「これ、どうしたんだ？」

「きれいでしょ？」

「だから、どうしたんだって？」と、せっかちに尋
ねると、

「朝に米を洗いにしたら、うちのかまどの上に座っ
て縮こまっていたのよ。たぶん誰かの家で飼ってる
兎だと思うんだけど、逃げて来たみたい。」

母ちゃんは凍えた両手を火鉢の上でこすりながら、
とても喜んだ。言うことには、私たちがこの新堂里
にやって来てからは、この日までひどすぎるほど苦
労ばかりしてきた。こうやって月兎が、それもこの
家に四世帯があるのに、その中の私達を訪ねて来た
時には、新年早々おそらく運が向いて来たんじゃない
かと言いながら、貧乏暮らしにくたびれたため息
をついた。

でも俺は、俺なりの別の希望がなくてはいけない
のだ。こんなかわいい月兎が他の人ではなく俺のと
ころに来たのには、おそらく俺の暮らしがだんだん
良くなるようだと思った。そして母ちゃんのチマの
前から月兎を取り出して持ち、こいつを口に付けて
みたり、頬にこすり付けてみたり、顎^{あご}にくっ付けて
みたりした。

本当にかわいらしくて美しい動物だった。

俺は朝食も食べる暇なく、そして母ちゃんが腕を
掴んで、

「お前、スギに持って行ってやろうって言うの？
うちにやって来た福は他人にやるんじゃないよ、我
慢よ、我慢。」

こう固く制するのも聞かずに、ばたばたと門の外
へ出た。裏通りに入って、スギを玄関に（呼んで会
いながら、もちろん二人で震えて立っているんだが、
親が怖くて部屋には入れず）こっそり呼び出してか
ら、

「この月兎、ちゃんと育てろよ。」と、外套の中か
らそいつを取り出してやった。俺の予想通りスギは
二重まぶたのその目を丸く開くと、両手でさっと掴
んで、スギもやはり口を付けたり、頬をくっ付けて
みたりするではないか。しかし胸にぎゅっと抱きし
めて抱えるのには、俺はさすがにひやとして、

「ああ、そうしたら骨が砕けて死ぬよ、兎は両耳を
つかんで、こうやって…」と兎の扱い方まで教えて
やらずにはいられない。言う通りに両耳をつかんで
立っているスギをじっと見つめながら俺は、この家
が俺の家で、その上スギが俺の妻ならどんなに良い
かと思った。スギが女性用の靴下一つ買ってくれと
頼んで、俺がわかったと承諾してから一か月近く経
つが、それさえもできないことを思うと、俺自身が
憐れに思えた。

「こいつが大きくなればつがいにして、子どもをた
くさん産ませよう。その子どもを売って、売ってす
れば、そのうちに大金が…。」

そうして兎を持ち上げていくらのぞき見ても、一
体雄なのか雌なのか見分けがつかない。これがちょっ
と心配になり、

「でもどっちかわからなきゃ、つがいにできない
な！」と一人ぶつぶつ言う、

「それは、今に…」

スギはこう顔を少し赤らめると、ぎこちない表情
に笑みを混ぜながら

「後で大きくなればわかるでしょう！」

「そうだな！　じゃあちゃんと育てろよ。」と、家
に帰って来てからは、次の日から毎日一度ずつ兎を
見に行った。

兎が日ごと変わっていくというスギの言葉を聞いて、俺はとても嬉しかった。

「最近もよく食べてるか？」と、尋ねると

「ええ、残飯ばかりやっていたけど、今日は白菜を
あげてみたら、とてもよく食べるわ。」

と、スギも満足そうな答えだった。俺はこう病氣
もなく、よく食べてくれさえすればいいだろうと思っ

た。予想通りスギが

「最近はやたらに飛び回ってウランチも外に行ってしてから入ってくるのよ。」と、黒目勝ちの目をきらきらとさせる時には、すっかり大きな大人の兎になった。もうつがいにしてやらなきゃと思ったが、俺は金がないことを心配しながら家に帰って来た。

しかしどんなに考えても金を工面する方法がなく、俺が着ている外套を質に入れるか、そうすれば何を着て出かけるか、判断に迷いながら五日間兎を見に行けなかった。そうするとある日、夕食を食べていて母ちゃんが

「クムチョルのお母さんに聞いたんだけど、スギがあの兎を食べたんだって？」と、腹を立てるので、びっくりした。うちの母ちゃんが嫌がるのを俺が無理にせがんで、一度スギの家に結婚を申し込んで断られたことがあった。建前ではまだ幼いということだが、その実は金のある家に娘をやろうという思惑だった。これを母ちゃんが知って、侮辱されたというように彼らをひどく憎んで、

「そりゃそうよ！ あいつらが動物をかわいがると思うの？」

「それで、兎を食べたのか？」

俺はこうぱつと目から火が出て外に飛び出たが、とうていわかり得ないことだ。手ずから5色の縦縞（子ども服の袖の柄）のチョッキまで着せたあの兎を、まさかスギが食べるとは思えなかった。

だからスギを呼んで、あの兎をちょっと見せてくれと言ってもなんの返事もなく、顔ばかり赤らめて立っているのを見ると、食べたのは確かだった。こうなるとこの女が心変わりしたのは十分にわかった。後で一緒に暮らそうと俺たちだけで交わした約束を忘れていないなら、俺が大事にしているあの兎をあいつが大胆に食べるはずがないじゃないか。

俺はしばらく憎々しげににらみつけると、

「兎持って来いよ、俺の兎ここに出せよ。」

「ないわ！」

スギは泣きそうな顔だったが、まもなく首を振り

ながら

「お父さんが私の知らない間に…。」と、面目なさそうに最後まで言うこともできない。

実はこの時、スギが三、四日ほどご飯も喉を通らず、ひどく病んでいた。煙草会社に勤めて稼いで来る娘がこうご飯も食べず病んでいるので、スギの父は急に怖くなった。そうかと言って肉を買って来て栄養をつけさせることもできないので、結局は娘も知らぬ間にその月兎を捕まえて食べさせてしまったのだ。

しかし俺はそんな事情は知らないで、人の兎を食べたことに呆れて、呆然と立っているスギがただ憎らしかった。何がそうひもじくて月兎を、と再び

「月兎出せよ、連れて行くから。」という

「取って食べたのよ。」

ようやくはっきり言い、いつのまにそんなに溜まっていたのか、涙がぱたりと落ちる。そして何を考えたのか腰のあたりを探ると、あの財布（は俺たちが二人でこっそりと婚約した時に、金の指輪を買う金はなく、急ぎだったので俺が夜市で十五銭で買っていた財布を代わりにやったのだが、それ）を取り出して、つんとして横を向くのだ。

この女め、人の月兎を食べてこう拗ねるなら、俺はどうすればいいのか。しかしここでこれ以上騒いでは、俺ばかりが悔しいことはわかっていた。スギの胸元を大急ぎではだけさせ、腰のあたりにその財布をもう一度無理やり押し込んで、追いかけて来るかと思い、家に向かってびゅんと走って来た。あいつが俺の月兎を食べたから、いくらあの親父が反対しても、そしてあいつがたとえその気がなくても、今になっては俺の妻にきつとなってくれなきゃならないのだ。

こう俺は思い、蒲団の中でよく考えてみると、あの月兎が俺にとって本当にありがたい動物だということにようやく気付いた。

（これで間違いなく、お前は俺のものだ！）

参考文献

- 韓相武「金裕貞小説にあらわれた江原道女性像」,『江原文化研究』第24輯,2005年,pp.109~113.
- 全商國編『金裕貞 小説選集 山里の旅人』,ヨニン M&B, 2016年,「山里」pp.121~137,「月兎」pp.241~246, pp.300~301.
- 朝鮮日報社編『女性』1巻2号「彼らの結婚プラン——どんな夫,どんな妻を迎えるか——」,朝鮮日報社,1936年,p.5.

朴鍾祐・石塚由佳「金裕貞文学の翻訳VI」,『海港都市研究』第19号,2024年,p.50.

朴 鍾祐 (神戸大学グローバル教育センター・
人文学研究科／韓国文学)
石塚由佳 (韓国木浦大学非常勤講師／韓国文学)